

看護職の能力向上に関する研究 (看護管理学分野)

脳卒中患者の QOL を高めるためのリハビリテーション看護に関する研究

工藤 真由美 (岩手県立大学、准教授)、真下 綾子 (東海大学、准教授)

松下 由美子 (佐久大学、教授)、佐野宏一郎 (石和温泉病院、慢性期 CNS)

<要旨>脳卒中患者においては、廃用性症候群や再発予防、残存機能の維持、リハビリテーションにおける ADL の拡大により、重症化を予防することが重要となってくる。そのため、本研究は、最終的には脳卒中患者の QOL 向上にむけ、看護師のリハビリ看護実践能力を向上させることを目的としている。今回の研究は、現状における回復期リハビリテーション病院における脳卒中患者への看護の実態を調査のために、脳卒中患者に必要なとされる看護実践を測定するための尺度開発のための構成要素を明らかにするものである。回復期リハビリテーション病院で勤務する看護職からのデータを質的記述的分析にて、概念を明らかにした。

1 研究の方法

質的記述的研究とし、回復期リハビリテーション病棟を有する 2 医療施設の当該病棟に所属する勤務経験年数 3 年以上の看護師計 6 名とした。インタビューガイドを用いた半構造化面接によって 1 人 30~60 分程度の面接をおこなった。調査期間は、2015 年 11 月~12 月とした。なお、インタビュー内容は、脳卒中患者に対する看護について実施していること、看護実践を行う上で工夫していることとした。研究倫理審査は、東京医療保健大学研究倫理審査委員会の承認を得た (承認番号: 教 27-23)。さらに、研究対象の施設の看護管理者及び研究参加者に対して研究の目的、方法、プライバシーの保護、参加は自由意志であることを説明し、文書にて同意を得た。分析方法は、抽出したデータの意味を損なわない文脈で区切り、コード化し、意味の類似性と相違性比較しながら類型化し、サブカテゴリ、カテゴリに分類した。

2 研究の結果

研究参加者の年齢は、30 代 1 名、40 代 3 名、50 代 2 名であった。分析の結果 (表 1)、脳卒中患者に対する

看護実践及び課題について「実践」では、「患者の尊厳に配慮した対応」「認知力低下や失語症等の患者とのコミュニケーション」「等の 11 カテゴリであった。一方、課題では、「医療処置からの離脱困難」、「障害からの立ち直りを支援する難しさ」等の 8 カテゴリであった。

3 考察

脳卒中患者に関して、尿失禁に対する看護や日常生活動作に関する機能評価等の研究がなされ、排泄や日常生活動作への支援の重要性が指摘されていた。本研究でも患者が日常生活動作の中で患者が自力でトイレに行けるよう、積極的にかかわっており同様の結果を得た。一方、回復期リハビリテーション病棟の課題として、急性期病院より尿道留置カテーテルが長期間挿入されていたことによる排泄の自立障害を含む、「医療処置からの離脱困難」が示唆されていた。また、機能が回復すると過大な期待をし、患者や家族が障害を受容できず、精神的な支援をする難しさも浮き彫りになっていた。今後、これらの課題の解決にむけ多 (他) 職種や医療・福祉がさらに連携し、対策をとることが急務であると考えられる。

実践【カテゴリ】	課題【カテゴリ】
患者の尊厳に配慮した対応	医療処置からの離脱困難
認知力低下や失語症等の患者とのコミュニケーション	障害からの立ち直りを支援する難しさ
日常生活動作支援	効果的なケア継続の難しさ
多(他)職種連携による在宅移行支援	転倒転落などの有害事象を回避する難しさ
二次的障害の予防	在宅における患者・家族の介護力不足・困難
患者のやる気を支え、見守る看護	医療・福祉連携の難しさ
食事摂取への支援	認知力低下や失語症等の患者とのコミュニケーション困難
効果的な看護実践のためのスタッフ教育	脳卒中の専門的知識不足
原疾患(糖尿病・高血圧等)に関する看護	
介護力の育成	
有害事象の予防	